秋季の日照不足と長雨に対する農作物の技術対策

令和８年９月１５日

農林水産部担い手支援課

千葉県では、９月に入り台風から変わった熱帯低気圧や湿った空気、それらの影響で活性化した秋雨前線により、長雨・日照不足の状態が続いています。気象庁の発表によれば、９月１日から１４日までの日照時間の速報値は平年比で 34%となっており、農作物への影響も懸念されることから、次の事項を参考に技術指導に努めてください。

１　全般

病害の発生が心配されることから、必要に応じて千葉県農作物病害虫雑草防除指針に従い、防除を行う。薬剤の散布にあたっては雨の合間を縫って、その日のうちに乾くように殺菌剤を散布するなど、適切な防除に努める。特に、病害の初発がみられた場合は治療効果のある殺菌剤を散布する。

施設園芸では、被覆資材の汚れを落とし、遮光の開け閉めをこまめに行い、日照量を確保する。

２　水稲

（１）倒伏した稲は、穂発芽等が懸念されるため、多少早めでも収穫するよう努める。

（２）降雨直後に刈り取った場合や倒伏した稲は籾水分が高いため、速やかに乾燥機に張り込む。また、籾水分のばらつきが大きい場合は胴割粒発生防止のため、数時間、通風のみで乾燥してから火力乾燥を行う。

（３）稲刈り後のほ場で稲わらが吹き寄せられ、一部分に堆積した場合は、可能な限り散らすか、ほ場外に持ち出してから耕うんする。稲わらの分解を早めるため、腐熟促進剤等を利用し、耕うんは浅めに行う。

３　落花生

（１）日照不足により、収穫適期の遅延が見込まれることから、必ず試し掘りを行ったうえで収穫日を判断する。

（２）病害が発生しやすい条件となっているため、よく観察し、必要に応じて殺菌剤を散布する。なお、薬剤の使用にあたっては**収穫前使用日数に注意**する。

（３）ほ場によっては白絹病の発生がみられる。薬剤散布だけでは十分な効果が望めない場合は、罹病株を株元の土ごと除去し、被害の拡大を防止する。

４　大豆

（１）長雨による浸水や冠水などの湿害を回避するため、排水対策を徹底する。特に水田転換畑では、額縁明渠を確実に排水路につなげる等の排水対策を必ず行う。

（２）紫斑病の発生が懸念されるため、開花から２，３週間後と３，４週間後に薬剤防除を行う。

５　野菜

（１）野菜全般

浸水や冠水などの湿害を回避するため、排水対策を徹底する。

日照不足による生育の遅れや茎葉の軟弱徒長に対しては、葉面散布を行う。また、病害の発生が多くなることが予想されるので、罹病葉や黄化葉、罹病株を早期に除去し、発生初期からの防除を徹底する。なお、日照不足時は<u>薬害が出やすい</u>ので、農薬散布濃度に留意し、高温時の散布を避ける。

育苗中のものは、苗鉢等の間隔を十分にとり通気性を確保する。セル育苗ではかん水や追肥を控えめにすることにより、徒長防止に努める。

着果している野菜は、草勢を維持するために不良果の摘果を行い、株の着果負担を軽くする。

（２）施設野菜

施設内の湿度の高い空気が滞留しないよう換気し、可能な場合は循環扇を利用する。

軟弱な生育をしている場合、曇雨天後の強光による萎れ、葉や果実の焼けを防止するため、遮光資材を準備し、必要に応じて遮光を行う。

追肥は１回当たりの施肥量を少なくし、多回数での施用を心掛け、特に窒素過多にならないように注意する。罹病果や葉、花弁を残さないように徹底して取り除くとともに、早めの下葉除去や適度な摘葉による通気性確保を図る。

６　果樹全般

病害の発生が助長される恐れがあるため、園内をよく観察し、農作物病害虫雑草防除指針に準じて防除を行うとともに罹病葉、罹病果実の除去に努める。薬剤の散布については、必ずムラのないように丁寧に散布する。

また、園の排水に心がけ、滞水した場合は速やかに排水を図る。

７　花き

病害の発生が多くなることが予想されるので、必要に応じて薬剤防除を実施する。

また、施設内の湿度の高い空気が滞留しないよう換気し、可能な場合は循環扇を利用する。曇雨天が続いた後に急激な高温・強日射にさらされると、萎れや葉焼けを起こすことがあるため、遮光資材を準備し、必要に応じて遮光を行う。